

門 8
號 4535
卷

昭和
三十八年
八月
購求

喜劇嘘

三場

一 松浦博士邸門前

二 曰 應待室

三 曰 樂座兼

登場者

文學博士 松浦寛高

夫人 道子

令嬢 依代子

弟 道彦

女中 小清

下女 鍋

書生 小倉新三

文學士 春山一郎

醫學士 秋田福徳

磨長 星木峰吉

桂庵塔 小角

妓夫 猪の助

田舎娘	車夫	蓬貴	陸辰	職人	臍午
お里	先熊	藤助	徳右衛門	勇吉	前田嘉六

喜劇噓 じょ 三場

- 一 松浦博士邸門前
- 二 同 應接室
- 三 同 書齋

登場者

文學博士	夫人	令嬢	令息	女中	下女	書生	文學士	醫學士	廢兵	桂庵婆	杖夫
松浦亮齋	道子	佐代子	道彦	お清	お鍋	小倉新三	春山一郎	秋田稻穂	里木峰吉	お角	猪助
(三十三)	(四十五)	(十九)	(九)	(三十五)	(三十一)	(三十一)	(三十一)	(三十一)	(三十九)	(二十九)	(四十三)

田舎狼	車夫	苗賣	隠居	騾人	睥睨
お熊	赤熊	藤助	徳右衛門	勇吉	前田嘉六
(十八)	(四十五)	(五十三)	(六十二)	(四十一)	(四十七)

第一場

松浦村士郎門前

音重中程より補や上り
 寄りに冠木門、柱には松
 浦守高と書いた標札を
 打こらふ、門の左右は大
 分古くなつた板塀をの
 いらし、門内見通した
 處は、冬閑前植のり書
 きたり

時候は夏の初め、山の手に
 邊の正午頃を思はせし
 陽氣な晴あつ合方を春
 が開くと、磨兵屋木峠を
 (白く洋服、白の足袋) 門
 門より少しく下つた方の
 境に立ちまゐり、左の足を

埵こぼれの破やぶ穴あなから後のちの方かたへ
膝ひざのあひらき足あしを足あしして
み、左ひだりの腕うでの下したに支た柱しらべと
抱かかえて立たった形かたちは、何なに
いふも左ひだりの脚あしの腰こしか
ら下したを切き断つして不み具たが大おほ
とちるは鹿か鹿かとしか見
えふい、首くびから右みぎの腕うで
へ通とおりやうりものゝ掛か
け、通とお行人こうじんを見みかけ
は、大おほ声こゑに化くわ粧じやう不ふ具たが
不ふと云いつて居ゐる
舞ま台だいわしく上うへ手てク方かた程ほど
よき處ところに、苗なえ資し藤ふじ脚あし
荷おろを下くだして立たち、其その側わき
に隠かくれ、腰こしをぶつ、中ちゆう腰こし
にちろこ茄子かきの苗なえをいぢ
りながら、値ね銀ぎんとねてつ
て居ゐる

隠かくれ、山やまの勢せいのい、苗なえ
と、右みぎをくらゐ取とつとく
つたか

苗なえ資し、大おほ丈たけ夫と、上うへ苗なえでい
ますよ、且かつ那な……見
事ことな茄子かきかあつてさ
隠かくれ、十じゅう本ほんで、録ろくと云いふ
處ところが先まづづ相あ場ばらしい
な

苗なえ資し、清せい元げん録ろくと……無
理りは、左ひだりにねえ、且かつ那な、
五百ごひゃく、
黄わうひけきばつておくん
ふさい

隠かくれ、録ろくの右みぎいよ
苗なえ資し、ちや、四し百ひゃく、ねえ
且かつ那な、四し録ろくで買かつて下したさ、
いよ

隠かくれ、まア、今いま日は止とま
し、まア、

ト立ち上る

苗子(八) 八人(七) 事(有) 作(有) 作(有)

らねんて、且(那) げんとに

幾(何) ならあ(所) 下(さ)

うんです

慶(左) (三) 録(子) 買(つ) とき

ませ)

苗 ト 攝(は) 子(行) き(か) へ

苗子(八) ケ(ヨ) フ、仕(方) ね(え)

口(ち) け(む) す(か) へ 三(株) ま

け(と) き(ま) せ)

隠(左) (と) へ 押(か) っ(け) ら(れ)

た(か) 不(は) は(は) は(は) 不(は)

ト(主) 戻(つ) 二(苗) と(選) べ

再(も)、金(を) 押(つ) 上(す)

の(方) へ(退) 場

下(手) の(方) へ(職) 人(向)

去(登) 場

所(へ) へ 三(株) 苗(子) へ

所(へ) へ 三(株) 苗(子) へ

茄子(の) 苗(は) いく(ら) たい

苗(子) (八) 今(し) か(ら) 御(隠) 伏(さ)

んに、三(株) 五(百) 五(十) 五(十)

甲(し) ち(ま) 戻(つ) 上(す) います

所(へ) へ 三(株) 苗(子) へ

三(株) 五(百) 五(十) 五(十)

苗(子) (八) ケ(ヨ) フ、仕(方) ね(え)

口(ち) け(む) す(か) へ 三(株) ま

ませ)

所(へ) へ 三(株) 苗(子) へ

け(ら) ね(え) や 三(株) 仕(方) ね(え)

わ(ん) 三(株) 苗(子) へ

お(つ) 三(株) 苗(子) へ

ト(先) き(い) 上(す)

苗(子) (八) ど(っ) こ(い) し(よ) (ト) 荷

を(か) っ(ぎ) (胡) 瓜(の) 苗(子) や

三(株) 苗(子) へ

ト(先) き(い) 上(す)

所(へ) へ 三(株) 苗(子) へ

所(へ) へ 三(株) 苗(子) へ

所(へ) へ 三(株) 苗(子) へ

ッ方へ退場

唐兵は仲いあか

ら形で其後安ん

ん送るやから獨白

唐兵すすい申丸、口あ

けか五交山本交山あよか

ら驚く、それいふ山、

何時のうらうら其十餘

のきあふ、行つたか、

我輩の株は、財目か、

か、か、か、か、か、

斗か、一服石飲一個

さ、舌ん、い、い、い、

か、か、か、か、か、

か、か、か、か、か、

か、か、か、か、か、

か、か、か、か、か、

か、か、か、か、か、

か、か、か、か、か、

か、か、か、か、か、

と張り上げ、日露の戦

役にきん、松原、攻

撃、に、名、譽、り、る、傳、を、打、

つ、唐兵です、侍、吃

り、かく、い、き、り、自、由、に

人間です、同情

に、富、ま、せ、終、不、法、居、は、

と、法、實、お、め、か、行、い

ち、い、我、々、は、其、責、上、に

全、う、海、を、極、を、借

か、た、純、益、に、よ、る、こ、の

ゆ、く、の、今、下、を、輕、く、

い、め、す、さ、ア、宝、丹、は、い、か、

か、一、は、い、か、石、酸、は、い、か、

か、一、は、い、か、石、酸、は、い、か、

か、一、は、い、か、石、酸、は、い、か、

か、一、は、い、か、石、酸、は、い、か、

ト、通、り、中、か、ら、化、粧、し

中、書、を、中、し、て、見、せ

て、了、

上手の方より 桂を渡

か角、大きな風を敷き
をか、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭

女あな「か角、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、猪のさか
ぬ夫、その後は海無何物と
る角、けんにあ珍しし、

と、あきいすーん
ぬ夫「煙悪く矢紋様さ
でね

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

お角「あ、いそ登壇、下手の
方から杖を指しゆるる
お足下及至環、西人出
會頭」

ふ角へ 不や、あや、
それはまる、さく

ふさくは

おまへ、お聴かしの、私

今ぢや、は夫、太や、夫

厚共、様とさつちや

う、ま、まア、作、なく

ふ、い、ま、う、す、よ

お、ふ、い、ま、は、ま、ア、く、

お、氣、の、毒、な、**た、け**

ね、え、猪、の、さ、ん、で、人

向、は、七、こ、ろ、い、ハ、さ、き

と、さ、た、と、か、あ、ま

す、が、必、ず、力、を、こ、ほ

さ、あ、い、や、い、は、ね、幸、抱

か、肝、腎、で、ム、い、ま、す、よ

私、苦、む、ね、あ、の、時、分

は、随、分、見、ト、め、な、生

汁、あ、つ、た、が、ま、ア、き

で、お、く、ん、あ、い、は、け

ぢや、こ、の、あ、ぢ、で、い

指、折、り、の、桂、尾、株、に

ぢ、ま、し、た、よ、い、お

や、わ、ぢ、し、し、た、こ、と

か、自、家、の、**い、ま、**

勝、手、こ、は、か、り、喋、り、こ、と

け、ん、に、ま、ぢ、あ、れ、て、居

ま、し、た、お、子、あ、ん、お

登、飯、は、ま、ぢ、で、せ、い、丁

交、時、分、時、ぢ、わ、ぢ、し

の、字、は、ワ、イ、又、二、軒、さ

ま、何、い、も、あ、ら、ま、ん

か、ね、ち、未、念、心、で、お、茶

湯、**い、ま、**

お、ま、へ、**い、ま、**

ふ、い、ま、す、今、日、は、ま、人

の、用、事、で、少、く、も、え、ん、を

居、つ、ま、す、か、ら、何、や

又あつたあつた

お角へはてさう、侍遠慮
ふさふさ一寸おき
うささればいいに

お角へ折角ですか、今は
見せよ

お角へ左様ですか、いますか、
ではおみさんにお

お角へ
お角へ雅有う存じます、
お角へ

お角へハイ、左様を
お角へ

西へ今秋しも、お角へ
お角へは上りの方へ退場
お角へ桂を望は下手の方へ
お角へ行かんとすると、それ
お角へと見ら底兵衛か

お角へ左様行の不自由な
お角へ兵衛了、不敵と一個

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

又あつたあつた

お角へはてさう、侍遠慮
ふさふさ一寸おき
うささればいいに

お角へ折角ですか、今は
見せよ

お角へ左様ですか、いますか、
ではおみさんにお

お角へ
お角へ雅有う存じます、
お角へ

お角へハイ、左様を
お角へ

西へ今秋しも、お角へ
お角へは上りの方へ退場
お角へ桂を望は下手の方へ
お角へ行かんとすると、それ
お角へと見ら底兵衛か

お角へ左様行の不自由な
お角へ兵衛了、不敵と一個

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

お角へ

かば不自由な處女を憐
れんて下さい、あやぐ
涯も底もあつめか

ト心細い声を出す

花道揚巻亭の方から市
役所へ退役町あぢの
雀吏前田嘉六、腰弁
推才世平は登壇
上りの方から膝懸車
夫先能空車を挽
いて登壇

車夫「旦那お安く参ります
せ、駒込まで帰ると
ころです

雀吏は返事もせず
疲れた足を引揚つ
て上りの方へ退壇
車夫「ケコッ、不意に礼な

面心

ト腰弁を罵る處女
は自分のことだと思ひ
鬨をいわせ、きまろ
うわらう思ひ入れ

下手り方から道に迷
うた田舎娘お星登壇
花能は早くもそれと見

車夫「ねえさん、お安く
参ります

娘「わし車いらねえぢや
ちよつとら道の、あや
き、申しせんか、の、
車夫「何處へちよつと
いでますか、い

娘「本町の彌生町ぢや
あや、行きせんぢや

よ、まぢた多き遠らん
えか

車夫「そ、ア大妻か、
女行の跡を^{と云ふ}追はば
から二三日はあらず
せ

娘「はア、ね、上野の行

車端で赤い帽を^{被つた}

人に見えたら、十四五町

ほど走らへんて来たかい

に、けんとはまぢた二

三里もあるかか

車夫「^{幸徳の}井の筒までか、
おこらへん^{お目には}

お氣をすし^お

さんおんお目に感じ

ますせ

娘「おきりかのかね、わ
しきり、何ししあふか

んん

ト云ふとわ

車夫「ねんさん、心配す

ばや及ばねん、丁交際

生町の方へ帰る車か、

いくらむいよからあ

んごせん

娘「いくらむいよから行っ

てくれよかね

車夫「十餘町の二十餘町、

ねんさんか男か女か、下

娘「二里十餘、はアてまぢ

車夫「おんさん、おんさん、

おんさん、おんさん、

お村より、余程車体

お安い處かね

車夫「おんさん、おんさん、

秋田 先と……

春山 へつ、せー

秋田 せの……せの……

その、せんた

トちうつとまらつく

春山 何愛ない 一件、せ

の、せの……

秋田 せの、せの……その

……せんた、千位

春山 へつ、遠方ね、

散策かい

秋田 ウム、一す、ま、

何だか、せんた、……

は何か、

春山 僕かい、僕はせ……

秋田 へつ

春山 せの……せの……

せんた、せんた、

秋田 よせよ春山、真似ら

んか、せんた

春山 散れまも真似をす

る、はちやならね、全く

そ、せう、せう、せんた

閑口

秋田 あり、閑口、流る

浴に行くとね、僕に

かまはた、はやく行くと

ま、左ねるら、矢教

ト別れ、振るとして

ちんちん、せんた、

春山 春山、はやく千位へ行

せんた、

秋田 僕、何、何、

い、ちや、ちや、

春山 春山、僕に閑歩了

必要はあ、ま、

秋田 別に干渉、せんた、

せんた、君か閑口へ行く

不思深を... 心、お医者... 五五五...

積... 見... 文... 事人...

春... アイ...

積... どうかし...

春... 積... 秋田...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

春... 春... 春...

ト... 春... 春...

夕、マシタウるんす
こころ、同時に唐兵

唐兵は
あつ、痛つ

ト声なるく叫んで、よろ
くとすにのめら、

暮ふと秋田、少人其
声に致つて、及節と
突くと春

木の頭

唐兵が境の穴から、
うかへ陸して、左
の足首は、犬に噛ま
れて血みどろにちつて
居る、

松浦の令息道考は
書生の小倉新三に太
いかせて、門内より現は

道考は
ヤア、い、嘘つきク

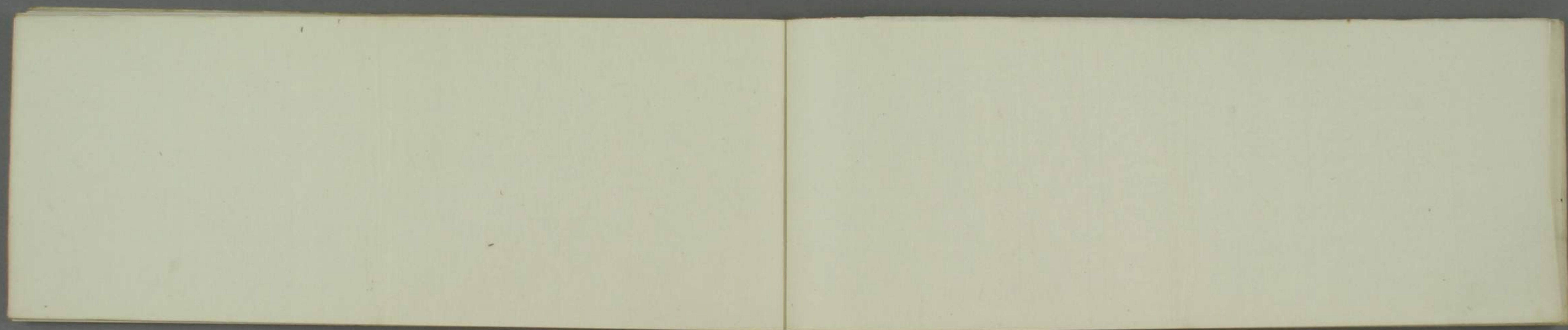
唐兵はアア

書生「さままア見んら
道考「便不具の唐兵はア

ト嘆し、主として、
道具廻り

(注意)

~~此處犬を使ふこと、
場合には、書生は、
の洋杖をおかせ、唐兵の
足を蹴る心持も見せ
る、威嚇は本おろ
たよつた、才か、毎年、
而の調和よし~~



第二場

松浦博士邸應待室

舞臺前（下手の方）、板の
 間の中廊下を仕切りに
 し、其下手は洋風の管
 素な應待室、廊下から
 扉を開き出入す、又
 上手は唐く日本風の客を
 敷、廊下からは襖をあ
 けて出入す、この客敷
 上手の方は斜に床間を
 設け、正面は障子を左右
 に開け放す、椽側（椽）に
 在る書割を見せし
 床に掛け軸、相間の
 額、書籍その他酒度の
 飾り付けは主人（主人）が
 世に

下は、其心持にこそし

令儀 依代子(一) **小本**

品シある高島田、服装

は地味カク、冬を教下琴

と環シもはる

道具がきまると、門前

の方でケタ、マシシの

声シが **下** 依代子シ 聲

のよととめて

依代子 うちの子をやない

かしら……清シで清シで

あは、はい、あは **下** **下**

しんか

ト十中か清、廊下の方

から **下** をあは **下** 登場

依代子 ボウ加何シかーん

ぢやなくって、大層な鳴き

方カちやふいか

あは **下** 左存シひひいますねえ

余所シの犬に噛カまれたのか

も知れませんが……ちよい

と見てまぬシうませう

依代子 身シ、ナシしてあは

あは **下** 累シうシん

トあ清は急シいで退場

依代子は又 **下** を **下**

てん

下はあ鍋あわねい

駈シけまて

あは **下** 大走シ、あは

また走シでふえまますよ

ト **下** とせう

依代子 **下** ひシくシすシちやあ

まはるか、静シかにあしふ

さい

不鉛「わし、げんとに吃聲ひくくら

「なによ
依代「大變大變何か大

妻ふつ
不鉛「ボクの奴お嬢さま、お嬢さま、
幸は七末しちすえ、お嬢さま、かすよ

依代「お嬢さま、お嬢さま、咬かいて行いつ

たうか
不鉛「人を唾かんぢてかす

依代「あら、まあ、何か、

「お可いんぢらうね
え、鉛や

不鉛「だからわし高生たか大
手てんぢらよ

依代「大お嬢さま、お嬢さまははく
つ

不鉛「左ひだりの足あし、唾か々つついん
ふかす、でけえこと血

か流ながれて、お嬢さま、

依代「まあ、大變お嬢さまなことも
「お嬢さま、はやくお嬢

「お嬢さま、はやくお嬢
「お嬢さま、はやくお嬢

不鉛「い、お嬢さま、お嬢

かすよ
依代「「お嬢さま、お嬢

不鉛「わし、お嬢さま、お嬢

「お嬢さま、お嬢

依代「お嬢さま、お嬢

「お嬢さま、お嬢

「お嬢さま、お嬢

「お嬢さま、お嬢

「お嬢さま、お嬢

左の足がねえ可^かも^も思^しふ
廢^く女^にさん^はひかすは^はい^いか
嬢^{ぢやう}様^{さま}、一^い作^{さく}あ^あえ^えさま^は
此^こ序^じを^を何^{なに}う^うつ^つけ^け下^{くだ}さ
る^るか^かね

ト^と思^しを^を叮^{てい}い^いて^て教^けめ^めよ

依^よ代^{だい}よ^よへん^{へん}と^とに^に何^{なに}も^も何^{なに}も

な^なら^ら可^かん^んた^たら^らい^いい^い
清^{きよ}は^は何^{なに}も^も思^しふ^ふた^たら^らい^い

お清登^{おきよのぼり}場^ば

お清^{おきよ}へ^へお嬢^{おぢやう}さま^{さま}、^お郎^{らう}の^のホ

々^々か^か女^にさん^はの^の左^{ひだり}の^の足^{あし}音^ね
に^に嘘^{うそ}み^みつ^つい^いた^たう^うか^かい^いま

すよ

依^よ代^{だい}よ^よへ^へお医^い者^{しや}さま^{さま}に^にお見^みせ

申^{まを}し^した^たい

お清^{おきよ}へ^へそれ^{それ}か^かね^ねえ^えお嬢^{おぢやう}さま^{さま}、

大^{だい}変^{へん}な^なこ^こと^とに^にな^なり^りま^まし^した
つ^つて^てい^いま^ます^すよ

此^こ時^{とき}を^を聞^きく^くか^から^らい^いま^ます^す

依^よ代^{だい}よ^よへ^へ何^{なに}も^も思^しふ^ふた^たら^らい^い

と^と思^しふ^ふた^たら^らい^いま^ます^す

お清^{おきよ}へ^へ小^こ倉^{くら}さん^はが^が頻^{しん}りに^にお

泣^なか^かを^をも^もう^うす^すつ^つて^てい^いら^らし^し
や^やさん^はで^です^すけ^けれ^れね^ねえ^えま^ま人^{ひと}

に^に逢^あつ^つて^て決^{けつ}判^{ぱん}す^する^るこ^こと^とも
れ^れは^はく^く酷^{こく}い^い推^{おし}察^{さつ}す^すて^てい^いま^ます^すよ

依^よ代^{だい}よ^よへ^へ嘘^{うそ}を^をい^いふ^ふた^たら^らい^いま^ます^すよ

お清^{おきよ}へ^へ

全^{ぜん}體^{たい}下^かを^をさ^さら^らし^して^ては^は足^{あし}を^を
忍^{しの}び^びし^しく^くな^なつ^つて^て果^はは^はり^りま^ます^す

と^と思^しふ^ふた^たら^らい^いま^ます^すよ

廢^く女^にさん^はを^をお世^よせ^せつ^つて^てお家^{いへ}の^のま^まに^にお世^よせ^せつ^つて^て

ト大声に叫ぶふらふ中
廊下へ現けよ

まき「まあ、静かにさつ」
たつて

誰はわかったやないか

トまきの小倉が頬に

あかぬき押道さうとす

と、突きつけ

唐兵「貴杯ぢやあからん、

主人をせせ〜

ト叫ぶふらふ、洋風ウ

應接室へ勝手に入る、

まきをばさる感す

今息道きは心配相ふ

顔とん、オツク後か

ら出てまて度接室の

中を散いて去る

唐兵「主人と呼ぶ、主人は

居ないか

まき「様むから静かにして受

待たせ

唐兵「此れは主人の愛蔵の掛け軸ぢやないか

唐兵「まき、用はない、主人

に談判があるんぢや、コラッ、

主人は居ないのかい

トわかると大きなまきをし

こあげれ

陣の
文庫敷のすゝは金鐘法

ふ、女中お清、下すお銘

の三人、琴を片づけな

り、隔の方へ縮かす

可笑味はあつて、か

ら、震えてた

まきの
標榜のすゝから主人文

筆行士松浦寛守全塚

（**中**）**まき**、立派な口癖

鬚髯あり、襟巻の太

くちで、高き半襟に倫理

と請つては人、紋附の
絹の羽織を着てたし

伏見へおゝ、阿久さま

お兵衛、旦那さま

お勤め、お打つて下さるか

安齋へは、は、は、は、は、そんな

に怖がることはいない

私が途へは渡すこと

すか

伏見へ阿久さま、お返しお

すつて下さるのたふいま

すか

安齋へ私づからいはい

やなやな、おやなな

ト生書、襦袢を脱ぎ

中座下へ、お

夜振立も脱いでた令

息遣者、それと見て

(Red ink notes at the top of the page, including "伏見へ" and "阿久さま")

いと奥へ逃げ込

麩兵衛、コラッ、主人は仕方の

お主人は、お書生

お主人を、お呼んで来て

ト麩兵衛お怒鳴つて休

ら度へ、安齋は、お

と入つてお前へ

安齋へ、わがままの主人

安齋へお

まきの小舎は、お

お

麩兵衛は安齋の密を

も、さすかに、お

お勤めに、お

安齋へ、お、お勤めか、お

人おいらで、お

お勤めは星木お

お、左の足お不自由

兵下す

寛政一ノ年、御姓名は
如也。素より、予か、お
類はよく存ト。此レ、
あし、御ノ子か、何
も、吾々、口、他、極、不、
言、つ、は、ら、う、方、か、
な

廣兵衛、め、つ、り、の、作、り、也

廣兵衛、か、我、輩、一、也、

寛政一ノ年、御用、の、改、め、を

是、時、下、す、お、銘、を、つ、よ、美

こ、度、極、室、を、取、り、也、

今、度、伏、休、し、と、中、中、清

は、定、を、え、り、下、手、の、方

店、下、へ、さ、す、つ、た、ま、う、ま、

こ、諸、利、の、換、取、を、氣、づ

かつ、也、

廣兵衛、先生、の、御、令、見、に、聞

し、ち、は、い、何、かつ、た、う

て、す、か

寛政一ノ年、何、か、し、た、と

作、り、か

廣兵衛、犬、を、喉、し、か、け、て、我

輩、の、足、を、踏、ま、せ、た、と

す

ト、手、中、に、繻、子、を、

左、う、足、を、見、せ、

寛政一ノ年、は、真、に、相、違

つ、ん、保、ち、也、作、り、の、不

時、何、も、な、し、申、込、り

ある、次第、に、私、か、作、り、に

代、つ、て、我、輩、に、謝、罪、を

致、し、ま、す

廣兵衛、先生、の、御、令、見、に、聞

の、み、ん、を、お、か、し、し、

我、輩、に、類、の、ま、う、に

堪、へ、は、い、し、

し

我々兄弟は遊家
もらはうと思ひます

成るべくは

寛政 女、た林か、そん

では

ト呼鈴を鳴らす

不鈴はい

ト下女不鈴 **不**なま

返事し入て来す

廢兵も寛政が女を好

いて思はずよ

寛政 小念を呼んでお出

下

不鈴はい

不鈴退場

書生小念登場

書生 不鈴に呼んでお出

寛政 道彦に一寸は度き

来すやうに

書生 坊っちゃん、お出

よつと **お出**

寛政 何處へ行きませぬ

書生 ああ、その **お出**

ア、たの **お出**

ちや、えとお出しい

了つては、いませぬが

ホチの **お出**

や、は **お出**

い **お出**

と嘘させたまふ

寛政 無駄口もやめな

い、道彦を呼んで

お出

書生 下、坊っちゃん

家、お出

寛政 嘘、**お出**

書生 **お出**

寛政 そんなこと云うは

はい、はやく道考を
呼んで来てほしいと云ふに
ト声も届きませぬ

ませはっ

ませは 詮方をかへ

退席

今見道考、心死さす
に茶あつても才も兼
を明け度様室へ入
つたか、限の方へ縮こ
まつて居る

道考、は處へお出

て下さる、は度様

さいと云ふに

道考怖さうに前へ

進む

おそははは、お方に大

と、おかしな相違な

いな

道考、だる、お又杯、この

唐兵さん、は、嘘……

道考、コレ、いんことを

喋る、お、お、お、お、お

か大と、おかしな相違

かけ、お、お、お、お、お

お、お、お、お、お、お、お

お、お、お、お、お、お、お

お、お、お、お、お、お、お

ま

道考、おまつて、領く

道考、お、お、お、お、お、お、お

お、お、お、お、お、お、お

お、お、お、お、お、お、お

お、お、お、お、お、お、お

お、お、お、お、お、お、お

お、お、お、お、お、お、お

お、お、お、お、お、お、お

道考へ、お、お、お、お、お、お、お

本... 先生... 先生...
と... 先生... 先生...
遠... 先生... 先生...

4

先生へ... 先生へ...
先生へ... 先生へ...
先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

先生へ... 先生へ...

赤い筆で書かれた横線

ト柱を打解けた風

飛散した

度兵全く氣をゆる

度兵 旅順の攻撃に急加

度兵 旅順には随分殺

度兵 此方面の敵は

度兵 わしつ場にある

度兵 旅順の石名天の

度兵 旅順の二の三方

度兵 砲台を奪は

度兵 石名天の

度兵 目撃す

度兵 旅順の

度兵 旅順の

度兵 旅順の

度兵 旅順の

度兵 旅順の

度兵 旅順の

度兵 旅順の

度兵 旅順の

同情の諸君は、他社不
下 ~~此~~ 共計 五二一

ト 尋ねるに
ト 尋ねるに

まゝに 只今、療治代も

美し上げます

療治代はははは、これ

は何れも痛み入ります

す

女中お清、再心を整へ

寛吉に紙包みと渡

しませ

寛吉は甘んじ、是れ

り

寛吉 是れ下は、お清さまの

療治代、一巻お換

めと預りたい

ト 療治代、おははは、

療吉 ~~此~~ 却てお氣の

毒下したん

ト 包みを開いて不思議

柳に帯をいり、寛吉

の顔とまつと見こ

療吉 先生、こりやア、

かあ、ませんか

寛吉 是れが廿四の療治

代や

療吉 何だと

寛吉 是れをおつこお好

う、あつこ、かよから

療吉 馬鹿にす、ま

ト 大言に怒鳴

寛吉 大言を打すこ

も、わしは怖も何と

も、ない、まア、能くあす

なさいよ、お前さん

は、今何と、お前さん

順の義理、お前さん

是れ、軍人おやと云

疾兵 ^{れん} ^か ^め ^つ ^も 我軍は

名承の軍人 ^ら ^や

疾兵 ^か ^め ^つ ^も 我軍は ^あ ^ま ^せ

嘔吐 ^を ^吐 ^く

疾兵 ^は ^我 ^軍 ^嘔 ^吐 ^を ^吐 ^く

えはなふい

疾兵 ^は ^だ ^ま ^れ ^ん ^鉄 ^羽 ^車 ^は ^注

疾兵 ^は ^い ^い ^い

疾兵 ^は ^其 ^名 ^承 ^の ^軍 ^人 ^は ^其 ^名 ^承 ^の ^軍 ^人 ^は

傷 ^の ^る ^に ^左 ^の ^脚 ^の ^膝 ^が

下 ^を ^切 ^断 ^さ ^ん ^た ^疾

兵 ^と ^言 ^ふ

疾兵 ^は ^去 ^つ ^た ^に ^去 ^つ ^た ^に

疾兵 ^は ^わ ^の ^脚 ^の ^膝 ^が

下 ^に ^傷 ^つ ^た ^に ^注

末 ^の ^人 ^に ^注 ^入 ^し ^て

疾兵 ^は ^去 ^つ ^た ^に

疾兵 ^は ^去 ^つ ^た ^に ^去 ^つ ^た ^に

疾兵 ^は ^左 ^の ^脚 ^の ^膝 ^が ^下

か ^こ ^ら ^い ^と ^さ ^よ ^お ^こ ^し ^ん

か ^い ^何 ^ん ^左 ^の ^足 ^音

を ^大 ^に ^吐 ^き ^や ^つ ^た

疾兵 ^は ^あ ^つ

ト疾兵は自分の左の

足を眺めてモゲク

しん ^ん ^ん

疾兵 ^は ^あ ^ま ^{さん} ^は ^現 ^在

さ ^し ^て ^あ ^る ^足 ^を ^無

いと ^去 ^つ ^た ^人 ^を ^欺

く ^其 ^報 ^の ^無 ^い ^餘

も ^あ ^る ^ま ^つ ^た ^あ ^ま ^さ

んに ^注 ^入 ^し ^た ^且 ^こ ^も ^二 ^双

方 ^帳 ^簿 ^の ^勘 ^定 ^は

併 ^し ^わ ^け ^は ^嘔 ^吐 ^を ^吐 ^く

わ ^か ^大 ^嫌 ^い ^や ^一 ^旦

お ^そ ^ろ ^に ^甘 ^内 ^の ^痔 ^は

付 ^も ^疾 ^兵 ^と ^似 ^ま ^す

此以上は山を渡す

度々、はつはつと難有

竟、イヤ、今直ぐには

流す此、根性か改まらぬ現

在完全、採つて今

足を不具、ちやんむ

とさけぬやりにちや

らあや、ほんとはに

左の足を、人前に恥か

しくねら、いぢつと

月、いつもあけ、お

すん、まる途有

ぬの身、なま

唾を吐、おや

ん、あつ

度々、難有い

更穴、あつ

いや、心加

責、まの

佛、免ゆる

度々、先生、その事は、

い、平...

に、ん...

ら、な...

ます

ト、度...

低、頭...

に、這...

度々、はつはつははは

馬、席...

ト、笑...

案、を...

独、り...

た、令...

伏、下...

ま、ん

寛平の御世に、氣平きへいの御時

とはなは

伏ふ休しゅうようの御時、
かと思ひましたわ

寛平の御時よ、
や、とて、
ん、行いき、つた、
ん、行いき、つた、

伏ふ休しゅうようの御時、
怪け依いは

寛平の御時よ、
か、道みち考こうにも困こん

な、あ、あ、あ、
戒けいしめ、
申まい

伏ふ休しゅうようの御時、
わしは、一寸、
を、来き、
を、来き、

伏ふ休しゅうようの御時、
阿あの御時、
阿あの御時、

すか、思おもひ、

ト、伏ふ休しゅうようの御時、

引ひき、
人ひと通と子こ、
を、お、

返かえり、
竟はり、
ま、

其そのる、
漢かん文ぶん、
つ、

返かえり、
は、
は、

寛平の御時、
私わたくしの、

の、
は、

思ひに
通ふは、心、ま、い、ま、い、ま、い、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

らねえ、あはれ

通ふ思、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

と云ふいとすかねえ
きき、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

一通、秋田さんと春山さん

と、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

あつや、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

親人、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

のりすから、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

う中、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

あかると、伏せよ
身に何か向ふまい

さア、それに就ては

私、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

一通、何か御好、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

田と、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

二人も、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

やつ、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

させ、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

おち、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

思つて、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

通ふ、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

夜、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

は、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~、~~思~~、~~ひ~~、~~に~~

います

寛政(一) 女中から縁談はむ

つかしんとそのちや

道(一) 何とか方法はまらぬ

のむいませうか

寛政(一) あるさう打んちや

かてあ

ト手と拵ぬいこ考

込む

道(一) あるさう打んちや

いますねえ

ト考込む

江戸令嬢佐代子 陰

王の陰にまこつて耻かし

さうにまこつてさうぬい

女中お清下手陰よの
陰にまこつてさうぬい

かゝあて寛政(一)はポン

と膝を打ち

寛政(一) さうちや、あるむ

あるむ

道(一) お考へか浮いすた

か

寛政(一) ちや、道や、わしは徳

いふこときめやう

と目あかの

道(一) ちや、程、さうなむこ

と、それか直しう

いませう

寛政(一) まかほも洗さな

かつなつちやか

道(一) ほんにまか伺い

ませんしなねえ

寛政(一) はははは、氣の早い

女中

道(一) ほほほほほ

寛政五丁、わしは男、
には、春山と秋田の中、
とちとわし私をばやま
らせし事かおれ本の方の
男に娘をばらうと思
ふかの

道よ、命を問欲かむつか
しうけしこころ
す

寛政、ナニとあつて
いふはこい

道よ、あなたは何もな
いと、経つていますけれど、
秋田さんや、春山さんか
あなたに腰たるとす

9は、つづつて子供か
に勝たるとす、四丁
もつてらいます

寛政、そこか人間知恵

くらぶと、そのおのちや、
吾々の身として、随
分、海を對し、恥
いと、思ふ、失能を、遠し
ることか、
寛政、珍らしいからな

道よ、
し、わんは、
い、あ、
わ、は、
せ、て、見、ま、せ、う、か

寛政、おはなれし、
二人か知恵をなめし
て見、
て、見、
て

道よ、
お、は、な、れ、し、
山、に、依、り、
お、は、な、れ、し、
お、は、な、れ、し、
お、は、な、れ、し、

ね
貴子 無論のことや
道子 ほんたう殿を用

貴子 止面から太刀打
ち 私に勝つて道
理はよい、幸多きを弄し
て来しは覚悟のふた

道子 こそあ言ふまに
湖邊 はんいもすまね
貴子 くわい、嘘は告
ふの替おぢや

ト舌捲の方、思塚
道子は送つて行く

陸より陸に陸れ
居た伏代子とお清
は此時前にあつた

お清 不嬢さま、おんこ
とに打ちまへ

伏代 春山さんにお勝たせ
申したいわねえ

お清 ところか、奥は平
常 秋田さん、お返す
いますからねん

伏代 秋田さん、お返す
集道 秋田さん、お返す
居た、お返す、お返す
ゆけ

お清 秋田さん、お返す
お返す、お返す、お返す
お返す、お返す、お返す
お返す、お返す、お返す

お清 秋田さん、お返す
お返す、お返す、お返す
お返す、お返す、お返す

お侍 ますからねえ
依りよ せんさんにおつ清
下とよ 依りよ 依りよ
附らこ 依りよ 依りよ

依りよ 二の軍師は
依りよ 依りよ 依りよ

何とお良し思ふおとしこ
依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ

お侍 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ

お侍 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ

せねはせ、お念さんを通
具に使つて、うまく敵の
計のり重をわいて見せ
ます

依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ

依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ

依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ

お侍 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ

お念さん 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ
依りよ 依りよ 依りよ

「置りますから、春山さん、今のお話を、お聞きなさい。わかつてよ。お情、今にもお話しなさい。」
ウツ

「お情退席」

春山 登壇

春山「やア、佐代よさん、

今日は

佐代「~~春山さん~~、さア、お情、

お返し

ト、お情をすゝめら

春山「段々暑く、~~春山~~、

ますなア

佐代「あア、大層な汗

ですこと、何方か汗

拭いて

春山「今日は、實に暑い日

に違ひやせん

佐代「はい、おはよう

春山「先刻、御内の前を

参りますと、秋田君に

ヒョウクリ出合へした

です

佐代「あらッ、それから何

うねば

春山「うまく、おはよう

と、お話しなさい、お情、

お話しなさい、お情、

お話しなさい、お情、

佐代「それから、何うおは

よう

春山「仕方なから、園口

まで、お話しなさい、お情、

今、お話しなさい、お情、

ついでに、お話しなさい、お情、

お話しなさい、お情、

依代へ おる全下は
おれはあまよ

春へ お茶結構

ト一見はらとるも

依代へ 春へさん、大事は

お打上つてよ

春へ 大事は、
おれはあまよ

依代へ あねあね、
おれはあまよ

又招に際なるや、
おれはあまよ

おれはあまよ

春へ 僕が先生、
おれはあまよ

又誘は、まん、
おれはあまよ

来ますか、考へてよ

か、こ、
おれはあまよ

依代へ 下へ 阿文杯は、
おれはあまよ

とあやませせは、
おれはあまよ

を嫁に、
おれはあまよ

ひす、
おれはあまよ

春へ 真剣をすか

依代へ 真剣をすか

春へ 下へ 阿文杯は、

依代へ 下へ 阿文杯は、

夏へ ハシと女中

お情を場

お情へ 下へ 阿文杯は、

お情へ 下へ 阿文杯は、

依代へ 下へ 阿文杯は、

お情へ 秋田さんか

春へ 下へ 阿文杯は、

依代へ 下へ 阿文杯は、

お情へ 下へ 阿文杯は、

お情へ 下へ 阿文杯は、

お情へ 下へ 阿文杯は、

お情へ 下へ 阿文杯は、

お情へ 下へ 阿文杯は、

お情へ 下へ 阿文杯は、

お情へ 下へ 阿文杯は、

トまなかに呼ぶ

小倉へはつ

トま生小倉冬場

お持のいよく、秋田さんか

いざーつ長山と村みま

すよ

小倉へはつ

お持の矢敗らわの四らに、

頼みますよ

小倉の大夫ふす成あゝあゝ

お持の事いひはあゝあゝ

か

小倉へこの通

ト波からノートアウク

と銀子もせしこと

せよ

お持のふは直に格す

お持の一件?

小倉へその作、先初り一

お持の一件? ~~小倉へその作、先初り一~~

お持の一件? ~~小倉へその作、先初り一~~

お持の一件? ~~小倉へその作、先初り一~~

お持の一件? ~~小倉へその作、先初り一~~

お持の一件? ~~小倉へその作、先初り一~~

相江

お持の嘘はまふ家の格お

す

小倉へはつ

ト小倉は中庭下にさ

更には下子の鹿橋室に

入、早よの下に隠れ

お持は佐佐木と居あつ

西人に、静かにと目

新不知で置き、全園

の方へ行え、おあて秋

田と居あつて下手度

橋室へさす

お持のいよく、秋田さんか

いざーつ長山と村みま

秋田へ来た
随分はたせりし

あ、何か取込中

あ、ちやわらわすか

あ、いゝ別れ、よく

いらつゝやうした

秋田へ依代さん

あ、今ちよつとお話し

秋田へ津一おなだ

あ、えっ

秋田へおなたとお話し中

あ、か

あ、あ、奥様と

秋田へ外はお定振はあつ

せんか

あ、別に、おなだ

秋田へあつ、おなだに靴あつ

あ、あ、あ、せんか

あ、えっ、靴

秋田へ男のお定振あつ

てせり

あ、あ、あ、男のお定振

女のお定振あつ

秋田へあつ、あ、靴は

あ、あ、あ、あ、あ、あ

秋田へあつ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

秋田へあつ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ

秋田へあつ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ

秋田へあつ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ

く、お情さん、水を一杯
い下さい

お情さん、今、お茶を入れ
てあげます、軽く御
免ねはせ

トお情退場

後に秋田は独自

秋田へあ、お情さん、

お情さん、お情さん、

わ、ウツカ、口を濡ら

し、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

お情さん、お情さん、

束つて、秋田が独り下
喋るのをすらいふ片

たか
秋田さん **おたかとおたか**
おたかさんです

ト吉を掛ける

秋田は見えよき勢

秋田 **やつ、奥板**

何時の間に

道よ **今しかた**

秋田 **何かあつてはね**

やしかた

道よ **すつかり伺か**

しかた

秋田 **ア、ア、ア**

縮

ト頭を掻く

道よ **時に秋田さん、あな**

たとお茶はせやすこと

かありますよ

替 **私の舌おこし、何**

ひんませ

道よ **おは、もうあな**

ものひんませ

秋田 **えつ、休め**

ア、先生お、ア、私に下

すしと **おん**

道よ **あなた、あなた**

けしとは **おん**

秋田 **ア、お許しかた**

おん **おん**

秋田 **おん**

おん **おん**

道よ **おん**

おん **おん**

すよ

ト道よわしくおん

た

秋田は日所程く〜

しきりに飲

テカル 早よの下に隠れ

た書生小倉新三、ノ

トブックをきして

ういへんの法しを

しん庄

女中お清、お金い

味と載せて持って

か、軒らしく意接室

トア、モト

の金の外に立ア

内の様子も全然加

店

道子はまわしく

をさくして

秋田さん、あはれ

せんよ

秋田トテ

私先生

はお腹かし

はお腹を伸す

海いせん

道よ〜せん

秋田〜

何か良い方法

秋田〜

一生懸命

道よ〜

随分思

段々

下

下

トまた吉か **低** くは
る
テカ
卓より下は字に
し

秋田は耳を傾けて
聞いて居たが、
大に驚かす

秋田 **奥** さん **ん** ん **ん** ん
お私に
道よお来たねん、
佐行

は若山さん、
大すよ
秋田 **ん** ん **ん** ん **ん** ん
此時、お清さん
を聞け

こ中に入
お清 **ん** ん **ん** ん **ん** ん
秋田さん、
咖啡を召

秋田 上れ **ん** ん **ん** ん **ん** ん
居た道よと、
秋田と西人
に咖啡を配
りながら

お清 ん ん ん ん ん ん
下は手を伸ばす、
書生小倉は、
ノートが
つろの紙を
引取ると、
そつとお清の
よにわ
たす

お清は、
そつと袂の中
に隠して
お清 **ん** ん **ん** ん **ん** ん
秋田さん、
御やつく

今 ん ん ん ん ん ん
ト退場
道よと秋田は又
低
い声で話を
始め、

秋田が驚かす
道よか無理に
静め、
形を
あらし

女中お清は
客を
入る

佐佐木と春山は心配相
な顔下けを遣へり

春山へ
お情さん
まきまき
なな

佐佐木へ
わかつて

お情へ
上首尾、上首尾
トお念の言いのれれ

佐佐木に話す

春山へ
お念君か筆記した

佐佐木へ
随分細かく書いて

あゝわねえ

春山へ

春山を仲先には佐佐木

お喜様へ

ト上手に、お清と

佐佐木へ

下手に、三人膝をふ

お情へ

ら、お念を集めて

お喜様へ

筆記を渡した温筆を

お情へ

お喜様へ、お喜様へ

春山へ

お情さん、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

春山へ

お情さん、お喜様へ

佐佐木へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

春山へ

秋田の奴には、お喜様

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

お情へ

お情さん、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

春山へ

お情さん、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

佐佐木へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

お喜様へ

お喜様へ、お喜様へ

春山 依代
よさん 専中
んばを陰かあつ

よすもつち
依代 御行
よせうか

春山 借らつて依代さん
のるを、大
もあつてよすんで見せ
ます

お情 お口うまいことを

春山 依代は顔と赤くす
か、ときまう
新か、僕は
つ教の面私をかくる
を考へて来ます

依代 大丈夫
ト依代は心配す
は時度接する方

通よ 秋田さん
すか、えつあつ
さらさらいけませ
んよ
ト通よは駄目と押し
こた

秋田 大丈夫です、では
ほ

ト秋田は通よに合致
しとせか、
字を差の方では

春山 大丈夫です、では
は

ト春山は依代とお情
に合致しとせか、

秋田と春山の両人
廊下へおち出合
らる顔を見合はせ

秋田と春山の両人
廊下へおち出合
らる顔を見合はせ

秋田と春山の両人
廊下へおち出合
らる顔を見合はせ

秋田 〇五ノ

秋田 〇四ノ

ト 〇三ノ

ト 〇二ノ

ト 〇一ノ

浴槽を見得る間に

道具廻り

松浦先生遺稿

第三編

Faint, illegible text in the left margin of the page.

第三場

松浦博士郎書齋

舞臺前や上手寄りには常
 足の二重家臺廻り縁附
 正面上手は床の間、下手
 は襖、上手の壁に寄せか
 けて、日中旧式の本箱を以
 山積み置ね、其前の方に
 机、机の上手は一つま流
 石本箱、机の下手には花
 ランプを燈す、
 床の置ね、掛軸、花瓶等
 余り俗をさしよつと選

ふ

書齋の下手縁側は低い
 こゝに廻り廊下植込、石
 燈籠、ある等の配置

よろしく、上手には、一劍
梅の立術、見知り、埒
ないあしよし
下手舞の前の方に竹垣
と枝折門あり

道具がきまると、主
人寛齋、机の前に端
然とせし、漢書と繡
いて座す

令嬢依代子、薄茶を

出て、下手より登壇

依代子「お又杯、お疲れて

ムいませう、一服召し上

れ

寛正「下、難有、ト茶々

終、こゝちあゝ、甘い服

加減ぢや

依代子「もうお席みあるはし

こは如何でござります

寛正「~~今宵~~ 潤々もの

かあ、から、また斬く記

き、こ座、積、ちや、あ、あ

た、はやく、怪人な方

かよからし

依代子「では、また後戻り伺

います、御やつくり

ト依代子退場

寛正齋は又机に向ふ

令嬢通才下手より登

壇

通才「お又杯、御振舞よ

り

寛正「お、通才、おあま

た、お、こ座、ちの、侍、後

三、又、是れを上げます、

彼方へ行つて早くお帰
み下さい

ト某子鈴から某子
はナんて思つて

道方「難有(ト)頂(ト)
はから、暫くせつて居
か)あ、ねえ、お父様

竟(ト)

道方「阿母さまおねえ

竟(ト)「お母さまお何し
道方「お父様は、はやく

お帰(ト)お父様は、はやく

つて

竟(ト)「あ、さうか、阿母様

は、さうなつて、ちがつか

つて東長のおやな、侍苦

勞く、お父様は、小

直(ト)お直(ト)お直(ト)お直(ト)

ら、皆々お先(ト)お先(ト)

ませはさい、と、候(ト)お先

およ、い、かい、介(ト)お先

道方「ええ

竟(ト)「い、い、お先(ト)お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

道方「は、お父様、お先(ト)

かあ、おそれたまへん、
桂城のよかる

お情、雨入もお終め申し
あせりか

竟可、イヤ、開い、所、方
お心持かい、イヤ、お心
世、終い、ん、置い、て、世、は

お情、旦那さまお舟休早
イヤ、ア、ア、遊ば、て、打、ま

いと、お事都合か
竟可、何、都合、何、

お情、イヤ、こち、ら、ア、ア、ア、
ム、い、ま、す、ア、ア、ア、
御、ヤ、

トお情退場

竟可、今夜は全程お、
ん、ぬ、ア、ア、ア、
何、時、に
た、い、は、く、は、る、

と矢の催促、
少し、お見、は、か、ら、な
く、困、り、ま、す、

ト独言、を、さ、い、ら、る、
又、書、見、を、始、め、

夫人道、上、登、場、

お情、また、お、お、お、
お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、

お情、また、誰、れ、か、ま、あ、
お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、

お情、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、

お情、イヤ、イヤ、ア、ア、
お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、

お情、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、

寝みよき
道よ、それではは、方々都
合か

道よ、おそれ山都合か
と見えよ

道よ、清いよ、人なほこと
申

道よ、誰か、それん、
在申して、命、う、た

道よ、清いよ、人なほ、
し、居つた

道よ、は、た、
し、た、かつ、た、わ、し、

道よ、お、その、
と、は、
分らぬ、早く、あ、さ、

道よ、お、その、
行、こ、
強、か、お、

道よ、お、その、
道よ、お、その、
程、に

ト下手の道場

道よ、お、その、
い、
い、
い、
ト、
く、
た、
う、

ト、
く、
た、
う、

ト、
く、
た、
う、

ト、
く、
た、
う、

ト、
く、
た、
う、

ト、
く、
た、
う、

ト、
く、
た、
う、

ト、
く、
た、
う、

道よは、オウん、忍び
空つてランプを吹き
消し、手さるゝに席
下の方へ取つて返す、

間もなく道よは細帯
を両手に縛り、燈を
持

續き、星の布を面
部を包んだ一人の孫
空、右手にピストル

を打ち、左手に
懐中電燈 提灯を携へて空壇、
細帯を金燈

西人書齋の中心入り、
道よは下手の方へ、
夕りとせよ

其舌に紅い眼を
見つめ、ちやんちやんの

懐中電燈 鼻先さへ、賊はピストル
を金籠提灯を突く

強盗、金を出せ

ト云ふ、其舌、手も足
もつんと震へて居

まゝ前は賤か不、相手
の標よを見せ仕な

妻、弱さうな泥棒

は、打ちすゑてやうり
は容易いかな、天の道具も
下女も其は怪儀、
は放す

させらぬは取返し加
つかぬ、どうせ金か欲

らう、幸い、昨夜に十
円ばかりの金がある、

かまふしこふ
甚口詰共此れこふ
けやく帰れ
ト机の角斗から
口をきして投げこ
ふ

賊はそれれ手解れ
かか金か

此後へまままなあふ
ト先唐へ吉山手正名
ふこふ

寛希へ見ゆけはよふぬ
欲の深い賊あやわ
の家は金とえ世ま若
から
財をわたりあつた
おつて行くかい
ト震え去

寛希へ嘘は吐かぬ本統の
ことかや

ト自若として
賊は金をはねた
うと道子の方へ
つけ、ピストル
に指をかけた

道子へあん、後生はすか
ら金おけは

ト震え去
此後へ金と出せ

道子へ出します、ね
え、おねねへト寛希の方
に向こ

寛希へ是れ
道子へ漢文語本の予税
か

竟可へあつ、えつ、これ
道よへする同

道よへあつ、えつ、これ
たのしみ
ふ、ふふふは

道よへあつ、えつ、これ
たのしみ
は、あつ、えつ、これ
は、あつ、えつ、これ

今はい、い、い、い、

困つたさう

ト竟可へは、あつ、えつ、これ

道よへ、あつ、えつ、これ
全は一文もな

全は一文もな、
は、あつ、えつ、これ

は、あつ、えつ、これ
あつ、えつ、これ

か

ト大声に怒鳴る

ト竟可へは、あつ、えつ、これ

を責めらんと、教をも
山を、あつ、えつ、これ

状を示し、
斗から、あつ、えつ、これ

斗から、あつ、えつ、これ
あつ、えつ、これ

あつ、えつ、これ
あつ、えつ、これ

あつ、えつ、これ
あつ、えつ、これ

あつ、えつ、これ
あつ、えつ、これ

あつ、えつ、これ
あつ、えつ、これ

あつ、えつ、これ
あつ、えつ、これ

ゆし床中獲りぬ
めて床中一人の心
をさか

心重く待用かッ

ト賊を雨つこぼし

る

宗の内にはまきし小倉

をけしり一回

小倉へ泥棒かッ

お館へ泥棒かッ

ト賊かまきり、あつ、こんつ、

寛之助、あつ、こんつ、

みんね静かにたさい

ト初〜床

女中お清はラシッ

火をつけた

伏代子は道子の侍め

を解く

道子は眠い目をこ

アッて床

心重は賊を縛るあつ

庭先から入つて林

に腰をあげ、賊を引

する

心重へ何か盗りぬものか

あつ、こんつ、せんか

寛之助へお館、こんとあつ

心重へお館は、紙箱を盗ん

て盗りぬ、あつ、こんつ、

お館、あつ、こんつ、

ト賊の懐から出る内

を包みを取

心重へお館、お館は、侍

を盗りぬ、あつ、こんつ、

お館、あつ、こんつ、

は、お館、お館、お館、

お館、あつ、こんつ、

寛之助へお館、お館、

お館、あつ、こんつ、

心重ハ 何事も、五石内ハ大
金すすな、い、何事すか
妹はは大金かあると云
ふことを知つてか、押
入つた歌謡かあるすか、
それらも知すか、
寛吉ハ 左様は多分知らば
かつたらうと思ひます、

秘は一文し金か、
申しは、家内か、
この金かあると、
つ下りて、
あなれか折角志し
たしつと、
おちまけししつと
おのん下すね江

寛吉ハ 左様は多分知らば
松浦さん
ト心重の事は更たま

寛吉ハ はい
心重ハ 嘘は待事さう様
おちやありませんか
寛吉ハ あつ、

心重ハ まさか、
金に執着、
あなれはあま、
人間の弱点には勝て
ないものと見えますな
寛吉ハ 何事もや面
目ひきつら、
松浦寛吉ハ、この通り
お前の手を買
てお前の致しますか、
おかけは、
言を待無用、
それには、
やまると、
ね、

心重ハ 何事すか、
妹はは大金かあると云
ふことを知つてか、
押入つた歌謡かあるすか、
それらも知すか、
それらも知らば
かつたらうと思ひます、
秘は一文し金か、
申しは、家内か、
この金かあると、
つ下りて、
あなれか折角志し
たしつと、
おちまけししつと
おのん下すね江
寛吉ハ 左様は多分知らば
松浦さん
ト心重の事は更たま
寛吉ハ はい
心重ハ 嘘は待事さう様
おちやありませんか
寛吉ハ あつ、
心重ハ まさか、
金に執着、
あなれはあま、
人間の弱点には勝て
ないものと見えますな
寛吉ハ 何事もや面
目ひきつら、
松浦寛吉ハ、この通り
お前の手を買
てお前の致しますか、
おかけは、
言を待無用、
それには、
やまると、
ね、

室五牛... (Marginal note in red ink)

心道「立しい、甚つて他言

は致しますまい、一つ

付と申友からい又来

人ちや、如何程なこと

心道「令嬢と指書の上

申分けたい

心道「伴もまうまいは、

御事流かち末ぬと申

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

心道「あなれも謝ませ

秋田先生、伏拝するに
無論、^{私に}下さるゝせ、^{私に}格
意、^{私に}伏拝するに
から、^{私に}格、^{私に}格

ト、伏拝するに、^{私に}格、^{私に}格

秋田先生、^{私に}格、^{私に}格
道子、^{私に}格、^{私に}格

お情、^{私に}格、^{私に}格
ム、^{私に}格、^{私に}格
一、^{私に}格、^{私に}格

幕

幕
幕
幕

NAVYDO SOU-STURE
MOTOMACHI BUNKYO
TOKYO
楠林南陽堂